

開きかけた傘・浮世絵の少女の……

森下 みさ子

浮世絵にみる限り、子どもが傘をさす姿は皆無に近い。乳母おんはひがさ日傘のごとく、幼な子が胸に抱かれ肩に負われ、或いは覚束なく歩む姿に、大きな傘がふうわりとさしかけられている図は確かにある。けれど、雨の中、子ども自らが傘をさしている図は、見当たらない。

実際、明治初頭日本を訪れた西洋人が驚き記したように、大した雨でなければ子どもは濡れるのをいとわず遊びまわっていたのだから、大雨については是非でも行かなくてはならない場所も子どもの身にはなかったのだろう。だから傘は、浮世絵界にあっては多く成人男女の手にゆだねられ、その美を開くための格好の小道具となる。時に型をとる役者の背後で輝く後光となり、時にしなをつくった女性の頭上で開く花となる。かと思れば、寄り添う男女の恋仲をほめかす相合傘ともなる。とりわけ傘を傾けた女性のなやかな姿や、傘をつぼめる女性の匂いたつ風情は、しっとりとなまめかしい媚態とみえて、傘は女性美をかなでる浮世絵の旋律の美しい装飾符となりおおせている。

*

そのなかにあつて、春信描く「五月雨」の一枚は、めずらしいかな、子どもではないが一人の少女

に傘を与え、少女自らのために（決して傘持ちの役ではなく）開かせようとしている。相傘の二人は、帯の結び方から推して若妻と侍女でもあろうか。肩に気軽にかけた手拭いと無造作に手にした布から、湯を浴びにきたところと知れる。等しく風にあおられた裾からはすんなりと細く白い脛がのぞき、前にかしぎ、或いは少女の方へと傾けられた項から、春信特有の清々しい色香がこぼれる。右側の窓枠にかけられた銭湯の看板は「明日休」を告げている。若妻と少女は、いったいどんな言葉交わしてすれちがおうとしているのか……。微かに開いた蕾みを想わせる口元にのぼった言の葉は、無



『浮世絵八華1 春信』（平凡社）より

音の声となつてふりすさぶ雨音や溝を流れる水音に紛れ、春信の空間を漂いつづけているようだ。少女はちょっと得意気に「明日は休みですってよ」とでもいったらうか。少女は湯の帰りらしい。一人前に肩にかけた手拭いは、けれど、その小さな身に余つて、ふっくり結んだ帯の背にかかつて髪をつくっている。——そして、「傘」である。春信ならではのなんともか細く小さな両の手が、少女のきゃしゃな身体にはふつりあいの大きな傘を開こうとしているのだ。女二人が入つて丁度よくらしいの傘……少女が傘を開ききつたならたちまち崩れてしまうであらうバランスを、春信は開きかけた傘を託すことであらうじてとどめる。そのあぶなっかしさ、そして、それゆえのいとおしさと滑稽さは、大人びてみせるあまりに拙さがこぼれる少女の不可思議を想わせはしないだらうか。一人銭湯にゆくことと等しく、傘をさす行為もまた勢いっぱいのまねびであるように……。そういえば隅に描かれた母子の犬も、この女と少女の対に巧みに付け合はされているようでもある。ともあれ、少女風の美女を描いて名高い春信がことさら「少女」を筆にしたとき、開きかけた大きな傘は、女性美を彩る装飾の位置から滑りでて、その入口に足を踏みいれかけた者のあやうさの上に添えられたのである。

*

思えば、カッパにすっぽり身を包むか傘をさしてもらつていた時期から、子ども用ではあれ肩にかついでいた時期、そしてどうかこうにか両の手で支えて雨に向けて傾けるようになった時期を経て、傘は今、私の身近にある。子どもの頃、傘もまた一つの遊び道具であつたこととは別に、その扱いにくさは大人の世界へ向う路の一つでもあつたのか、わずらわしさとともにほのかな愉悅をとまなつていた。ましてそれが、一人頭上に開くことのできる色鮮やかな小さな空であり、身につける何よ

りも大きな華であってみれば……。黄色い学童傘が光を透く花柄の傘にかわった頃には、私は傘をか
つがずにさせるようになっていただろうか。この少女のように……。いみじくも春信が浮世絵の片隅
に開きかけてくれた傘は、春信ねらう少女美の世界をのぞかせながら、そんな傘との結ばれを雨音の
中にしのび聴くことを誘いかけてくる。

(お茶の水女子大学)

。。。。
雨・子ども。。。。

雨の日の保育

長山 篤子